慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オーラルヒストリーと地域における個人の<歴史化> : 沖縄戦体験を語る声と沖縄県米須の場合
Sub Title	
Author	小林, 多寿子(Kobayashi, Tazuko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2010
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.15 (2010. 7) ,p.3- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集1: 地域研究とオーラルヒストリー
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20100700-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オーラル・ヒストリーと地域における個人の＜歴史化＞

―沖縄戦体験を語る声と沖縄県米須の場合―

小林　多寿子

１．はじめに

オーラル・ヒストリーは地域の歴史にとってどのような可能性を有するのだろうか。オーラル・ヒストリーは過去の出来事や経験を口頭で語ったものである。あるいは語られたことをもとに書かれた歴史をさすこともある。オーラル・ヒストリーはいま、聞き書きや証言、口述記録、ライフ・ストーリーやナラティヴなどのような、人が口頭で語るものをあらわす多様ないいかたと互換的な言葉となっている。いずれの言葉も口頭で語られたものというオーラリティ（口述性）の特徴をもつ。本稿では、オーラル・ヒストリーは、これらの言葉を総称するものとしてとらえ、「オーラル」に語られた個人の経験をもとに「ヒストリー」を考える方法としてみている。つまりオーラル・ヒストリーは、歴史的出来事をとらえる方法であり、オーラルな個人の語りを手がかりにして「歴史」の再構成をめざす実践でもありうる。

オーラル・ヒストリーから考えることのできる「歴史」は現在を基点として時間的に「近い過去の歴史」である。「近い過去の歴史」とは、吉沢南やポール・リクールの言葉に由来しているが、体験者のいる歴史をさしている（歴史学研究会編 1988 : 16-22、リクール 1990 : 204）。吉沢南は 1980 年代後半に歴史学におけるオーラル・ヒストリーの可能性を検討したとき、「史料としての体験」という概念を提起して、個人の体験を歴史に接続させようとするオーラル・ヒストリー研究の試みを先駆的におこなった。吉沢は、弓削達のあげた文字史料、遺物史料、歴史叙述という３つの史料に、「体験」を加えることを主張した。現代史的問題には体験者がいることを認識すると、「生きている人の体験」が史料となりうる。「史料としての体験」は個人の体験から歴史をとらえようという視点であり、オーラル・ヒストリーの方法としての可能性を拓くものとなった[1)]。

「近い過去の歴史」とは当事者が生きている歴史であり、個人的記憶のある歴史である。1990 年代から顕著になった第二次世界大戦をめぐる戦争体験の社会学的研究では語られた言葉としてのオーラル・ヒストリーが重用されてきた。第二次世界大戦あるいはアジア太平洋戦争はまさに当事者の生きている「近い過去の歴史」である。個人的記憶として語ることのできる人と歴史的出来事であるという人が混在している状況のもとでオーラル・ヒストリーは「体験」を得る有用な方法である。

戦争体験の語りというオーラル・ヒストリーが地域の「近い過去の歴史」をいかに構築して

いくのか。この問いを検討するのに好適な場を米須（沖縄県糸満市米須）という一つの地域にみいだした。米須という地域をとりあげて、オーラル・ヒストリーからいかに歴史へ接続させて考えることができるのかを検討してみたい[2)]。

２．2009 年 6 月 13 日 米須

【米須コミュニティーセンター】

2009 年 6 月 13 日、沖縄県の本島最南部、海に近い丘陵地帯にある米須の公民館「米須コミュニティーセンター」で糸満市教育委員会の主催による映写会「記録された沖縄戦・語られる沖縄戦」が開かれた。会場となったコミュニティーセンターの広間には、地元の人や近隣の関係者が集い、150 人以上の聴衆（「沖縄タイムス」2009/6/14）で満席であった。広間の後部には、糸満市南部の戦中戦後の写真や糸満市がおこなった戦災調査から米須の戦争被害の実態資料が展示され、休憩時間に参加者は展示資料や写真を食い入るように見ていた。

米須は沖縄戦の最激戦地であった。糸満市教育委員会の調査によると［糸満市史編集委員会 1998：871-877］、1945 年当時、沖縄県内に在住していた米須の人口 1259 人のうち 735 人が亡くなり、その戦没率は 58.4%という、糸満市のなかでも最悪の戦争犠牲者をだした地区である。1945 年 5 月末から 6 月にかけて、米須には後退してきた日本軍兵士と避難民が押し寄せ、米軍の攻撃が激化するなかで、住民の日常生活の場が戦場となった。米須の住民のなかでもとくに子どもと高齢者の犠牲率が高く、家族半数以上が戦没した世帯が 43.2%、さらに一家全滅は 14.1%と、７分の１の世帯はまるごと消えてしまった。1945 年の米須は、地元の身近な人びとが数多く死者となる場と化し、米須住民の戦没者にさらに避難民と日本軍の戦没者が重なり、戦後、大量の遺骨が残される場となった。

いまの米須は、サトウキビや葉タバコ栽培の盛んな緑豊かな美しい田園地帯のなかにあり、2009 年 4 月現在で人口 1286 人（世帯数 457）と 1945 年とほぼ同じ人口水準になっている。

【宮城聰の「沖縄戦証言記録テープ」】

映写会「記録された沖縄戦・語られる沖縄戦」は、おもに沖縄戦の映像資料と沖縄戦体験を語る声を視聴する会であった。会は前半と後半の二部で構成され、前半は糸満市総務部長や米須区長のあいさつの後、教育委員会の担当者が糸満市の戦災調査によってあきらかになった米須の戦争被害を概説し、米須に住む 80 代の女性が沖縄戦体験を語った。その後休憩をはさんで、後半は沖縄県公文書館の主任専門員である久部良和子（本文中の氏名は敬称略）の司会で、地元の３人の女子中学生が解説を朗読しながら、公文書館が所蔵する米軍が撮影した沖縄戦の映像資料と米須出身者が沖縄戦体験を語った証言の声を視聴した。

とくにこの日の催しでオーラル・ヒストリーの観点から注目されるのが沖縄戦の体験を語る声である。前半では、沖縄戦当時、米須国民学校の教員をしていた久保田千代子が 1945 年 3 月 23 日から始まった沖縄戦体験を会場の人びとに語った。後半では 11 人の米須の人たちが

1968 年に語った「沖縄戦証言記録テープ」の声が流れた。体験者自身が聴衆の前で語る生の声と録音された声。とくに後半の「沖縄戦証言記録テープ」の声は約 40 年前の米須で録音された声であり、『沖縄県史』のために語られた声であった。

『沖縄県史』のために語られた声が流れるまでにはつぎのような経緯があった。1965 年から琉球政府より刊行がはじまった『沖縄県史』全 24 巻のなかで沖縄戦に関する巻は『沖縄戦通史』と第９巻「沖縄戦記録１」と第 10 巻「沖縄戦記録２」の三巻ある。そのなかで第９巻と第 10 巻は「沖縄戦記録」として「沖縄県民の戦争体験」にあてられている。第９巻の冒頭では戦争体験を生存者の記憶によって記録するという趣旨がつぎのように述べられている。

「本記録は沖縄県民の戦争体験を、生存者多数の記憶によって記録し、まとめたもので　ある。」（琉球政府 1971「編集趣旨ならびに凡例」）

沖縄戦の米軍上陸地点以南を第９巻に、以北と離島地域を第 10 巻に収録することにして、第９巻は北谷村、北中城村（中頭、那覇、島尻）全域の調査をおこない、第９巻の編集委員であった宮城聰が星雅彦と手分けして担当し、総数 211 人の沖縄戦体験の語りが掲載されている。

「採録にあたってはおもに座談会形式で録音テープに収め、それを文章化する仕事は宮城聰（本県史編集審議会委員）と星雅彦（作家）があたり、四百字詰原稿用紙三千枚余を収録した。」（琉球政府 1971「編集趣旨ならびに凡例」）

宮城聰は、1967 年 10 月からとくに中城、西原、南風原、高嶺、喜屋武、摩文仁、真壁の村々を回って字ごとに沖縄戦体験者からその語りを聞き取り、オープンリールのテープに沖縄戦体験を語る声をおさめていった。県史に掲載された数だけでも 155 人、宮城は第９巻全体の約４分の３の聞き取りをおこない、その文章化と全体の解題を書いている。

1968 年 8 月 30 日と 31 日の二日間、米須において当時の区長宅で座談会形式で沖縄戦体験を語る場が設けられた。11 人の米須の人が米須の西側の地区と東側の地区に分かれて集まり、一人一人に体験を語ってもらっている。オープンリールに残された声はその場で録音された声である。テープに録音された 11 人の米須関係者は、1968 年当時、米須に在住の 10 人と米須出身で那覇在住の人１人、女性６人、男性５人の計 11 人である。那覇在住の女性は 1968 年 8 月の米須での語りに加え、後に 1970 年に那覇の宮城の自宅で再度体験を語っている [3)]。米須の人びとの声は「沖縄戦証言記録テープ」に録音された声であり、宮城はこれらを「個人の戦争体験の採録」としている（琉球政府 1971:915）

1995 年に宮城聰の遺族より公文書館に寄贈された遺品は公文書館において宮城聰文書として所蔵されているが、そのなかに録音テープが入っていた。

宮城の残したオープンリールテープは劣化しわかめ状になっていたという。公文書館では専門家に修復を依頼し、音声が蘇り、デジタル化された。そこで、公文書館で担当者であった久部良は、音声公開に向けて宮城が聞き取り調査をした集落を回り、語り手本人あるいは遺族から許諾をとる作業をおこなった。2009 年より許諾の得られた音声は公文書館で公開されている。あわせて久部良によれば、「地域で得たものは地域へ返す」という方針のもと、「地域への還元」

の一環として米須での映写会が企画された[4]。

【復元された声を聴く】

「あーあー、本日は曇天なり、本日は曇天なり、1968 年 8 月 30 日、字米須における戦争記録編座談会、字米須西部における戦争記録編座談会」

まず「証言記録テープ」の冒頭に吹き込まれていた声が流れる。声は正面のスクリーンに文字にもなって示され、聴衆は耳と目で声を視聴する。冒頭の声は沖縄戦の体験者が当時の区長宅に集まり、語りの録音を開始する合図の言葉である。声の主は宮城聰とともに『沖縄県史』第 9 巻を編集した、当時、琉球政府立沖縄県史編集所長であった名嘉正八郎であることがスクリーンに表示される。

女子中学生のナレーションで米須の 11 人の名前が記された『沖縄県史』第 9 巻の頁（915 頁）が映しだされ、一人２、３分づつ声を聴くことが紹介される。

「今年一月、沖縄県公文書館に所蔵されている「沖縄戦証言記録」が公開されました。そのなかには米須出身者の証言記録も含まれています。波平幸進さん、山城加那さん、太田ハル子さん、山城のぶ子さん、大屋清昌さん、山城よしさん、久保田次郎さん、久保田清さん、儀間かつさん、徳元たみさん、徳元文子さんです。」

防衛隊に召集された大屋清昌、米須の壕で最激戦にまきこまれ日本軍兵士に壕を追い出された山城よし、子どもとともに自決を考えた後、捕虜となった久保田清、日本軍の炊事班にいて馬乗りされた壕で生き残った山城のぶ子、県立首里高等女学校の生徒で激戦地で負傷兵の看護にあたった徳元文子、摩文仁国民学校の教員で生徒とともに陣地構築作業に駆り出された久保田次郎、子どもや高齢の家族とともに食料を探しながら戦場を生き延びて捕虜となった大田ハル子と儀間かつ、終戦後 9 月半ばまで投降を拒否して壕に潜んでいた徳元たみ、終戦直後にサイパンから引き揚げて荒れ果てた米須に戻った波平幸進、戦後、散乱した大量の遺骨を集め、魂魄の塔を米須の人たちが建設したことを語った山城加那。11 人の声は、この順で流されていった[5]。

11 人の声はとても明瞭であり、淀みがない。座談会形式とはいうものの集合的に語るのではなく一人一人が順番に語る機会を割り当てられて、それぞれの人が沖縄戦当時、自らの見たこと、聞いたこと、おこなったこと、感じたことを能弁に語っている。インタビュアーである宮城聰の問いに応答する声もある。しかし、多くの声は淀みなくほとばしるような声である。その声の淀みのなさから、それぞれの戦場体験の記憶がいかに鮮明に刻まれているか、23 年前のこの米須で起こったことがいかに明瞭に想起されているかがわかる。

それから 41 年たった会場には証言者の家族や親族も多数参加して、父や母、祖母祖父の声を聴いていた。

３．体験を語る声と「歴史」―米須の場

沖縄戦は、戦後 65 年たったいま 70 代以上の人たちにとって人生のなかでおきた出来事として個人的記憶があり、戦場体験や疎開体験として直接体験された出来事である。他方で 65 歳以下のものにとって沖縄戦は自分の生まれる以前におこった体験されていない出来事であり、たとえば 40 代以下の若い人たちにとっては教科書や平和学習で学ぶ歴史的出来事である。現在、沖縄戦は個人的記憶として語ることのできる人と誕生以前の歴史的出来事であるという人が混在していて、直接体験者が漸減している状況にある。糸満市の人口比率で 70 歳台以上は 11.6%であること（2009 年 5 月）をもとに推定すれば、沖縄戦の直接経験者と非直接経験者はおよそ１対９の割合にあるだろう。

ポール・リクールは、「近い過去の歴史」を「歴史的記憶と個人的記憶を仕切る境界」に「あちこちに穴があいてくる」という多孔性の比喩でとらえている（リクール 1990：204）。米須の場はまさにリクールが多孔性の比喩でいいあらわす状況にある。つまり個人的記憶としての沖縄戦と歴史的記憶としての沖縄戦が混在して記憶と歴史のあいだの境界にたくさんの穴のあいた状態にある。米須でおこなわれたこの映写会の場は、沖縄戦の直接体験を語る声、そして過去に語られた個人的体験の声、この二種類の声が流れ、これらの声を非直接経験者が視聴する場であり、歴史的記憶と個人的記憶が入り混じるような、まさに多孔的な状況にあった。

2009 年 6 月 13 日の映写会の時点では、録音された声の主である 11 人のうちすでに９人が他界している。２人は存命であるものの病床にあり、会場に来てかつての自らの声を聴くことはできなかった。だから、米須の会場は、存命ではあるものの十全に語ることはできなくなった人、そしていまは亡き人の声を聴く場であった。

この日に流れた 11 人の声のなかから２人の声をとりあげて、オーラル・ヒストリーと「近い過去の歴史」の関係について考える手がかりとしてみよう。一人は山城よしの声であり、もう一人は久保田清の声である。山城よしの声は沖縄戦体験証言者の声として二番目に流れたが、自身は映写会の４日前に逝去している。このことが「歴史」との関係でどのような意味をもつかを考えてみたい。そして三番目に流れた久保田清の声は語り手自身が会場で聴くことはできなかったものの、息子が父の声を聴いていた。父は語りのなかで息子の言葉に言及しており、息子は父の語りのなかにある自己の言葉を聴いていた。そして息子は息子自身の沖縄戦体験を語りうる。すでに『県史』に掲載されたある体験をその語られた声に立ち返りつつ、その個人と親密な関係を結ぶものたちの語りと重ねるなら、さらに多面的にオーラル・ヒストリーと「歴史」の関係を考えることができるだろう。

【＜歴史化＞された声】[6)]

映写会で沖縄戦証言者の声として２番目に流れた山城よしは、『沖縄県史』第９巻（938-942 頁）では沖縄戦体験について、おおよそつぎのように語っている。

空襲が始まったころから壕に避難する生活が始まっていたが、役所からの伝令にしたがい家族を連れて山原へ疎開をすることにし、豊見城あたりまで進んだ。しかし北から米軍の攻撃が迫っており、疎開を断念して米須に引き返し、そこで家族ともども戦闘の最前線にまきこまれた。戦闘が止んだとおもったら「アメリカー」が来て「デテコイ」という言葉で壕を出て捕虜となった。捕虜生活では食糧も欠いて厳しい暮らしを送ったという。

映写会で紹介された彼女の声は、激しい攻撃を受けた最後の激戦期に家族で避難していた壕を日本軍兵士によって追い出されたところで、つぎのとおりである。

字幕「証言者　山城よしさん　沖縄戦当時 30 歳　家事」

「壕入りなさいと主人にいわれましたもんですから、その晩に、また親戚みな、荷物をまとめて、米須に帰り、今のひめゆりの南側の壕に入っていたんですよ。

そこで 10 日間ぐらい壕生活をして、夜は外に出ていって、そこら食糧を集めて水汲みなんかして、一日のごはん炊いたり、おかずを作ったりしておりました。

もうあれからは戦さが激しくなって、もう日本の兵隊さんが武器もなにももたないで、どんどん南に下がるんですよね。

それでうちの壕にも兵隊さんが入り込んできて、武器もなにももたないで、裸足の兵隊さんもいれば、なにも食べ物ももたずに入り込んできて、”君たちは出ていきなさい、兵隊というものは最後まで残って戦わなければいけない”、”住民なんて出て行って、艦砲に当たれ当たれ”っていわれましたんですよ。

それ聞いて、もう私、憤慨してですね。

こんなにいままで兵隊さんが苦しいときも、ご飯炊くときなんかも、”おばさん、お砂糖ありませんか”、”うちにもご飯ください”なんていうとき、”はいはい、一緒に食べましょうね”って、分け与えて食べて、こんなに今の戦さは苦しいけれど、”本土から助けがきていまに勝ちますよね”って慰めあったものですのに、最後になったら住民、兵隊にこんなにもされるもんですかねとおもって、着のみ着のままですね、出されたんですよ、私たち、この壕から。

そのとき、鰹節とお米を少し持って出ようとしたら、”これも君たちが食べるもんではない、兵隊が食べるんだ、君たちはそのまま出ていけ”っていわれまして、”はい”といってそのまま出たんです。

そんでまた小さい壕でも探して入らないといけないっていうので、米須部落の前の山のなかで小さい壕をみつけて、そこで隠れていたんです」（1968/8/31）

山城よしは映写会の４日前に 95 歳で逝去している。会場には家族が出席してこの声を聴いていた。久部良は映写会の冒頭の紹介のなかで山城の逝去を悼んでつぎのように語りかけてい

る。

久部良「大変残念なことに、先日、山城よしさんがお亡くなりになりました。

よくお年寄りが一人なくなると、その地域の図書館が一つ無くなることとおなじことだといわれます。95 歳になられたよしさんには 95 年にわたる生涯があり、米須地域の行事などに参加された豊かな経験をお持ちだったとおもいます。

米須で生まれ、山城カマタロウさんと結婚し、子を育て、お元気なときは地域の活動に積極的に参加されていたことでしょう。兄弟やお隣近所とのつきあい、お孫さんたちの成長をなによりも楽しみにして、大勢の家族に囲まれ幸せな老後を過ごされていたことがこの一枚の資料 7)から伺うことができます。こんなに大勢の家族に囲まれていて、よしさん、きっと幸せな方がだったんだろうなとおもいます。

山城よしはどんなおばあちゃんでしたか？若いころはどんな女性でしたか？また、今日、いらっしゃっていますでしょうか。息子のイチロウさんにとってはどんなお母さんだったでしょうか。それは米須のみなさんがよくご存じだとおもいます。」(2009/6/13)

米須に生まれ、米須に生きた山城よしは、米須の人びととの豊かな交わりのなかで生涯を送ったことが彷彿とさせられる紹介である。婦人会活動や伝統行事で活躍し地域の人びとの信頼が厚かったという。久部良は「地域の図書館」にたとえて高齢者の逝去でその経験と知恵の蓄積が失われてしまうことを惜しんでいる。新聞報道によると（沖縄タイムス 2009/6/23 朝刊）、満席の会場には三男と長女が出席しており、41 年前に沖縄戦体験を語った母の声を聴いて「あふれる涙を止めることができなかった」という。

> 「４日前に亡くなったばかり。若々しい母のよどみのない声、ついきのうのように話す生々しい体験が目に浮かぶ。２人は高校卒業後、本土に渡ったため、母の戦争体験を聴くのは初めてだった。」（沖縄タイムズ 2009/6/23 朝刊）

声の聴かれ方は、声の主である語り手と会場で聴衆となった聴き手がどのような関係性にあるのかに依拠している。米須の場に集まった多くの人たちにとってはいずれの声の主も家族や親せきであったり、近所の人であったり、米須のなかで日常生活を送るなかでよく知った人たちである。約 1200 人の住む米須には、沖縄県で「門中」として知られる父系血縁のつながりがあることに加え、字のなかでは東と西で地区が分かれ、８つの班組織で地域生活は密に営まれている。米須の住民の日常生活は、血縁・地縁関係や、幼友だちや同級生という年齢集団など、人と人とを結ぶ関係は複層的に重なっている。だから、米須の人びとにとって 11 人の声の主は家族や親族あるいは地域の暮らしのなかでさまざまな接触のある人たちであった。

他方で、山城の声は、個人的体験を語るオーラルな声であるが、トランスクリプトされ沖縄戦記録として『沖縄県史』という歴史叙述へ組み込まれている。県史のなかに掲載された山城の体験はすでに沖縄戦という「近い過去の歴史」を構成する「歴史」のなかに位置づけられ、歴

史的過去を構成する「史料としての体験」となっている。体験を語ってから約 40 年の人生を生きた山城であったが、その豊かな生きられた日々からは離脱して、語られた場からも切り離されて、「近い過去の歴史」を構成するテクストとして「流通」している。そしてその体験は、沖縄の現代史にとって重要な沖縄戦を描く史料となって＜歴史化＞されている。

【＜現前化＞する声】[8)]

米須の場は、近隣の顔見知りや家族親族の年長者であった人たちが 40 年前の声をとおしていまここに＜現前化＞された場でもあった。復元された声は、米須の人たちにとって地域のなかで顔のわかる人たちの声であり、その人たちがまだ若かったときの姿の記憶をそれぞれの視聴者に想起させる。復元と再生をとおして＜現前化＞されること、それは＜歴史化＞とは逆方向のベクトルで、個人を過去から現在に呼びもどし、現在とのつながりのなかで再認識させ、位置づけなおす作用である。

米須において、その声は地域ではよく知られた、そして人によっては親密な他者による語りの声である。だが、他方で沖縄戦体験を語る声は『沖縄県史』のなかの「証言記録」として地域の外では「流通」し、県史のなかで＜歴史化＞された声である。その＜歴史化＞された体験を元来の語られた場に呼び戻したのがこの米須の場であった。「流通」とは、発話のコンテクストを離れて異なるコンテクストのなかに声が再置され据えられていくことを指している。米須で生きた人たちの声ながら外部で「流通」されていた声を、すなわち厳密にいうなら体験を語る声のトランスクリプトをもとに編集された語りを、元々の語られた場に＜現前化＞させる機会であった。

映写会で 3 番目に声の流れた久保田清は来場していなかったが、会場では息子が父の声を聴いていた。

ナレーター「次の証言者の久保田清さんは、子どもたちと死のうとおもったが、子どもたちに死ぬことを拒まれ、生きることを決心した様子を語っています。」

久保田清は、11 人の証言者のなかで存命している二人のうちの一人である。

字幕「証言者　久保田清さん　沖縄戦当時 29 歳　防衛隊」

「父のところにいったら、アメリカ軍が来て、その金を全部もっていた。そのときまで私はアメリカ軍見ていないんですよ。その百メーターくらい道側を裸になって歩くのが見えた。もうお終いだという時期になって、自決するほかないと。

で、二つになる次男と長男は八つになりおったんですよ。もう君たちはこの世に生まれてね、あのアメリカ軍にやられて死ぬより、”もう一緒に死のうね”

私は桑の木の棒があったから、あれつかんだわけですよ。

”もう死のうね”ってつかんだ。
長男のほうが、”死ぬのは嫌やですよ、死なないほうがいいですよ”、いうたもんで、わたしはやめたんですよね。もうあんときはもう子どもら潰して、自分は手榴弾でやろうと覚悟だったんですよ。
しかし一番不思議を私、感じたのは、こういう時期に雨が降った、こういう時期になっても雨に濡れるのよりも、家があったらなあとおもうくらいね。」

＜現前化＞された声を親密な他者はいかに聴いていたのか。映写会の会場では「死ぬのは嫌やですよ、死なないほうがいいですよ」と父にいった息子がこの声を聴いていた。後日、筆者とのインタビューで息子は、米須に米軍が迫り激しい砲撃のなかで最期を覚悟して海岸の岩穴へ父に連れられて移動したそのときの息子自身の体験をつぎのように語っている[9)]。

K：うちは忠霊之塔、あそこは自然壕、下は、大きな壕なんですよ、自然洞窟。忠霊之塔の敷地と民家のあいだに小さな入口があって、出入り口があったんです。そこに入って、おふくろは母は、家族の６名、家族の食事を調達しに外に出て、帰ってくるときに弾にあたった。
おやじは防衛隊にいて、祖父がいたんですよ。祖父が頭（かしら）になってやった。おやじがまたちょっと怪我して、帰省を許されたんですよ。もどっていた、その壕に。一時帰省されて。
もうこっちで、死ぬよりは海にいって、スーガーって水の出るところがあるんですよ。あそこへ行って、おいしい水を飲んで、きれいな空気を吸って、おいしい水を飲んで死んだほうがいい。あそこまで行ったんですよ。
途中でまた祖父が艦砲の破片でやられて、破片で足をけがをして、まず水を飲んでから、そのスーガーっていうところから 80 メートルくらい西側にインガーって、ちょっと岩穴がある。その岩穴に潜んでいたんです。
そこで翌日になってから、騒々しさに起こされて見たら、もう周囲に米兵がいたもんだから、これでは助からない、だめだっていうので、おやじは鍬の柄をもって、柄をもって子どもを打って殺して自分も後を追うつもり。
「シナンセーマシド、オトゥ」、標準語で「死なないほうがいいよ、おとうさん」、っていったらしい。
県史にあるんですが、ぼくはいうた覚えはないんですけど、子どもがこうしていうもんだから、ふりかざすのは止めたらしい、
＊：そのときふりかざしていたら・・・、
K：いまいなかった。
＊：そのときのことは覚えているんですか？

Ｋ：うろ覚えがある。いうたことは覚えがない。自然洞窟、夜、暗くなってからしか行動できないから歩いて海の方へ行ったんですよ、小さい道がある。あそこから行ったんですよ。大きな道は気づかれるから。

アダンの葉っぱが茂っているところがある。両サイド茂っているところがある、こっちからスーガーにいって、そこで捕虜になったんです。」

（2010 年 3 月 3 日インタビュー、於・米須コミュニティーセンター、K：息子、＊：筆者）

あのとき、息子は地元の言葉で「シナンセーマシド」といったはずである。だが、その言葉の発話は覚えていない。当時４歳８カ月であった息子にとって父の語った状況は「うろ覚え」としてある。父の声によって想起され父の語ったストーリーをとりこみながらも息子は息子の目でみたことを独自の体験として語っている。ただ、『県史』に記載された父の語りには息子の記憶との食い違いもある。父と一緒にいて唯一生き残った男の子が次男の自分であったのだが、父は長男として語っている。「歴史」に組み込まれ「流通」している父のストーリーと４歳であった息子の記憶には重なりとギャップがみいだされる。『県史』によって＜歴史化＞された父の語りが米須の場に呼び戻され、父とともにいた息子の語りと重ねたときにはじめてそのギャップと重なりがみえてくる。この点は、父の＜現前化＞された声に対して父とともに生き残った息子自身の独自の体験の語りと重ねることでわかる。ここに体験が表出されるオーラル・ヒストリーの流動性と多面性という特徴が示されている。

４．オーラル・ヒストリーと＜歴史化＞の位相

米須コミュニティーセンターでおこなわれた映写会の場は、沖縄戦体験を語る声というオーラル・ヒストリーをオーラルなままに聴く場であった。この場は、オーラル・ヒストリーと「歴史」の関係性の特徴をいくつものレベルであきらかにしてくれる場でもある。「近い過去の歴史」とはいかなる状況なのか。そして時間の変遷とともに「近い過去の歴史」を体験した人たちが逝去していくとき、この状態をどのようにとらえたらいいのか。「歴史の領域」にはいっていくことを＜歴史化＞ととらえるなら、過去の出来事が歴史の一部になっていく出来事の＜歴史化＞に加え、個人もまた「歴史の領域」にはいっていくという意味で＜歴史化＞されていくさまがみてとれるのではないか。

2009 年 6 月 13 日という時点を＜現在＞とするなら、1945 年の沖縄戦はいま 64 年間の隔たりがあるが、＜現在＞はたえず進み、その進展につれて、＜現在＞との時間的隔たりはたえず増していく。沖縄戦はやがて「近い過去の歴史」からしだいしだいにだれも体験者のいない「遠い過去の歴史」へと延伸していく途上にある。この日、復元された声の流れた米須の場は、オーラル・ヒストリーと＜歴史化＞の位相を考えさせてくれる手がかりがいくつもみいだされた場であった。そこで、以下に５つの点で米須の場の特徴を整理してみよう。

米須の場①－「近い過去の歴史」

沖縄戦における米須住民の戦没率から推計すると生存率は約 4 割であった。戦争が終わったときに約 500 人の生き延びた米須の人たちがいたことになる。いまも健在な人は何人もいるだろう。だから米須において沖縄戦はまだ個人的記憶として語ることのできる人と沖縄戦が誕生以前の歴史的出来事であるという人が混在している状況にある。

先述のとおり、リクールの言葉にしたがえば、米須は「歴史的過去と個人的記憶を仕切る境界」に「あちこちで穴があいてくる」という多孔的な状況にある。そしてリクールが「近い過去の歴史」では「生存者の証言と、書いた人から切り離された史料がまじりあっている」（リクール 1990：204）と指摘しているが、米須には戦争体験の語りと『県史』に記載された「史料としての体験」が混在している。

米須の場②－世代連続的他者

映写会では、前半で米須在住の体験者が語り、後半で 11 人の証言者の復元された声が流れたが、11 人のうち 9 人は逝去している。体験者が逝去するということは「近い過去の歴史」をただ遠ざけていくだけなのだろうか。

リクールは、A・シュッツの「先行者－同時代者－後続者」という世代連続的他者の概念[10]に着目し、とりわけ「私の誕生以前に存在していた世界」としての先行者の世界へのつながりが物語によってなされることを指摘する。たとえば「祖先が語り伝える物語」として先行者の世界が語られることによって「歴史的過去と記憶のあいだに橋が架けられる」ことを論じている。

「この物語は、死者たちの時、私の生まれる前の時と解されている歴史的過去へむかう記憶の中継点の役を果たすのである」（リクール 1990：204）。

この指摘は、記憶と歴史のはざまにある「近い過去の歴史」におけるオーラル・ヒストリーの役割を端的にいいあらわしている。

リクールの言葉になぞらえていえば、沖縄戦はいま、「近い過去の歴史」として個人的記憶と歴史的過去のあいだにあって「生存者の証言」と語った人から「切り離された史料」がまじりあった状況にある。そのなかでオーラル・ヒストリーは、先行者の世界と現在を生きる同時代者の世界を媒介する役割をはたしている。つまりいまは先行者となった体験者たちがかつてその体験を語ったオーラル・ヒストリーは、私たち同時代者にとって歴史的過去と記憶とのあいだに橋を架けるものである。

米須の場③－社会的先行者

シュッツのいう世代連続的他者のなかでとくに先行者の概念をていねいにみると（シュッツ 2006：310-323）、先行者のなかに、「社会的先行者」といういいかたで、同時代者の世界に対して境界づけが流動的な先行者の世界があらわされている。「社会的先行者」はもはや同時代者

ではないものの同時代者と完全に切り離なされたわけではなく、同時代者とはいまだ近い距離にある。だから「社会的先行者」とは近い過去にあって同時代者から「純粋な先行者」へと移行段階にあるものを「社会的先行者」と考えることができるだろう。つまり「社会的先行者」はまだ歴史になっていないが、「歴史の領域」にはいりつつあり、＜歴史化＞されていく過程にあるものをさしている。

逝去者は、逝去によって過去の人になり、さらに「歴史の領域」にはいっていくという＜歴史化＞の過程にある。とりわけ直近の逝去者は同時代者の世界から抜けたばかりの「社会的先行者」としてみることができ、同時代者にとってまだそこに生きて佇んでいるような姿が記憶のなかに鮮明にあるが、すこしづつ時間が経過するなかでその人を直接に知る記憶をもたない人がふえていき、しだいに「純粋な先行者」となっていく。その過程が＜歴史化＞である。つまり、「歴史的過去へむかう記憶の中継点の役を果たす」先行者として同時代者から移行していくなかに＜歴史化＞がみいだされる。

＜歴史化＞とは「歴史の領域」にはいっていく過程であるが、過去の出来事が歴史になっていくという出来事の＜歴史化＞だけでなく、個人にもまた＜歴史化＞の過程をみいだすことができる。

米須の場④－オーラリティの力

米須の場は、沖縄戦当時の場所の記憶をもとに多様なストーリーが縦横に語られ集積される空間であった。それらの物語る声によって近い過去の出来事が＜歴史化＞されていく過程にあることが集合的に示された場であった。いいかえると、映写会はオーラリティの力を明確に示す場となった。映写会の場という＜現在＞において、オーラルな沖縄戦体験の語りが再生されたが、集合的にそれらのストーリーを語る／聞く、ストーリーが語られる／聞かれるという行為のなかには＜歴史化＞された過去が＜現在＞に呼び戻される＜現前化＞のさまがみいだされる。

リクールは、「物語の時間はパブリックな時間」であり、「声に出して読まれることで、ストーリーは共に集まった共同体に一体化される」ことを指摘している（Ricoeur, 1980 : 172）。オーラル・ヒストリーがオーラルなままに流れたことによって、つまり声の共同性と声による共有可能性によって先行者たちのストーリーは＜現在＞を生きる参加者たちの集合的記憶に組み込まれていく。その一方で、声を聞いた個人のストーリーにも時間軸をもとにとり込まれていく。父とともに沖縄戦の最終局面を体験した息子はおぼろげな記憶をもっているにすぎなかったが、父の語る声は息子自身があの体験を語るときに喚起させる力をもっている点もオーラリティの力であるにちがいない。

沖縄戦体験者たちの語りは、米須のなかで共有され＜歴史化＞されると同時に、ライフ・ストーリーにおいて先祖の物語や出自の物語として織り込まれていく。その一方で＜現在＞においてオーラルな声が再生され＜現前化＞される状況は、いかにオーラリティの力が強く作用し

ているかが示されている[11]。

米須の場⑤－世代継承性（ジェネラティヴィティ）[12]

米須の場は沖縄戦の体験をいかに語るのか／語られるのか、いかに語り継ぐのか、世代継承性（ジェネラティヴィティ）の観点から論じられる問題を投げかけている。

米須の会場でいまは亡き母の声を聴いた娘や息子たちのなかに母が沖縄戦体験を語る言葉を初めて聴いたという人たちがあった。家族が生きる世界、親子という親密な他者のあいだでは意外に戦争体験は語られてこなかった。しかし、約 40 年前に母が語った沖縄戦体験は、地域の外ではすでに沖縄戦体験の証言記録として「流通」している。地域の外のエージェントにその「流通」は委ねられ、沖縄戦を論じるなかでときに引用されたり、あるいは展示されたりしてきたのに、家族の世界あるいは地域のなかで顔のわかる人たちの世界では十分に共有されないままにあった。そのような状況のなかで米須の映写会は、地域において沖縄戦体験の語りをいかに継承し伝達できるのか、つまり地域における世代継承性（ジェネラティヴィティ）の問題をなげかけている。

時間の経過によって体験者が逝去し､｢近い過去の歴史｣はしだいに遠ざかり隔たってゆき｢歴史｣になりつつある。出来事の＜歴史化＞だけでなく個人の＜歴史化＞の進むなかで、オーラル・ヒストリーをオーラルなままに聴く機会は過去へ向かうベクトルを現在に引き戻して＜現前化＞させる作用がある。＜現前化＞された声が視聴によって共有されるとき、継承者が育成される可能性が生まれる。つまり継承者とは、語られる体験をただ聴くだけでなく聴いたことを自己の記憶にとどめ、自己のアイデンティティを再編したり自己の歴史に組み入れたりする解釈行為をおこない、そのうえで受け継いだ体験のストーリーを伝える世代継承的（ジェネラティヴ）な伝達者に転じる可能性がある。継承者／伝達者は、年長世代への遡及行為と同世代か年少世代への波及行為をおこなう世代継承的（ジェネラティヴ）なエージェントになりうるであろう。語り継ぐ行為における世代継承性（ジェネラティヴィティ）とは、＜現在＞を基点に過去へのベクトルと未来へのベクトル、両方向のベクトルをあわせもつエージェントによって体験のストーリーを継承し伝達し、さらに継承する世代という意味での「レガシー・ジェネレーション」[13]という次世代の創出を促している。このジェネラティヴなエージェントが地域のなかでいかに生成されうるのかを考えることもこれからの課題であろう。

５．おわりに―オーラル・ヒストリーの可能性としての声の公開と声の「流通」

映写会の場はいまだ十分に論じられていないオーラル・ヒストリーの特徴があらためて顕在化する機会となった。とくにつぎの二つの点をあげてみたい。

ひとつは、オーラル・ヒストリーが包含する３つの重層的時間性である。映写会は沖縄戦当時の 1945 年、体験が語られた 1968 年、そして復元された 2009 年という３つの時間をオーラル・ヒストリーがとりむすぶ場として注目される。沖縄戦体験を語る声というオーラル・ヒス

トリーをオーラルに聴くとき、1945 年と 1968 年と 2009 年、体験の時点と語りの時点と再生の時点という三つの時間が重なっていることがはっきりとわかる。これはオーラル・ヒストリーをトランスクリプトによる文字で読むのではなくオーラルに聴いてこそ明瞭に示されるオーラル・ヒストリーの特徴である。そしてその点を明示するものが柱時計の音であった。

1968 年に米須で座談会の場となったのが当時の米須の区長の自宅であった。区長宅には柱時計があったことが復元・再生された音からわかる。沖縄戦を語る声に「チクタク、チクタク」という長針が時を刻む柱時計の音、そして３時、４時になるときに「ボーン、ボーン。ボーン」と振り子が鐘を打つ音が語る声に重なってはっきりと聞こえてくる。この柱時計の音は、トランスクリプトされた体験記録にはけっして記されない音である。だが、オーラル・ヒストリーをオーラルなままに聴くとき、この柱時計の音は、オーラルな語りの場と語りの時点があったことをリアルに伝え、聞き手をその場へ曳きこんでいく。オーラル・ヒストリーが語りだされた場のリアリティをあらわし、語り手の声の抑揚や声の肌目とともにたしかに語られたことへの信頼性をも獲得する音である。そしてオーラル・ヒストリーがいつも再生可能な録音された音声であるとき、体験の時間、語りの時間、再生の時間という３つの時間の重層性をたえず包含しているということを気づかせてくれる音でもある。

いまひとつには、オーラル・ヒストリーを語る声の復元・再生と声の公開という試みがオーラル・ヒストリーの新たな可能性を如実に示したことである。これまでオーラル・ヒストリーを方法としてもちいるとき、オーラルな語りを得て、トランスクリプトしてリテラルな文章をもとに考察することが大半であった。オーラルに語られたもの／聴いたものをトランスクリプト、つまり文字に起こしてリテラルに論述するように使ってきた。方法としてオーラル・ヒストリーを用いたとしても、個人的体験の語りはオーラルからリテラルへという一方向性のなかで考えられてきた。そして自分自身でおこなった調査以外ではオーラルな資料をオーラルなままに聴くことができる状況も稀であった。沖縄県公文書館による「沖縄戦体験記録テープ」の修復による声の復元と声の公開という試みはオーラル・ヒストリーの一方向性を崩す可能性を示唆している[14)]。

たとえ 40 年前の劣化した録音テープであっても、声の復元、つまりリテラルに活字化された体験の語りを音声録音に戻ってオーラルに聴くことが技術的に可能になったこと、そして公文書館での公開という公的機関において誰でもアクセス可能な状態にされたことは画期的なことである。私はこのような試みの先例をまだ知らない。声の復元と公開は、録音テープの修復や音声のデジタル化というテクノロジーの発達のおかげであるが、とくに声の公開は声の発話者の許諾によって可能になっている。

声の復元によってオーラル・ヒストリーはオーラルからリテラルへという一方向だけでなくリテラルからオーラルへもありうる双方向なデータであることがあきらかにされた。「史料としての体験」はいつでも音声データにもどって再考できる可能性がある。そして声の公開はオーラル・ヒストリーの新たな「流通」につながるだろう。

米須コミュニティーセンターの場は、オーラル・ヒストリーが個人の＜歴史化＞をあらわすものであること、そしてその＜歴史化＞の諸相が如実に示された場であった。米須の検討をつうじてあらためて地域における＜現在＞とは「近い過去の歴史」をめぐる直接体験者と間接体験者の混在状況にあること、その「近い過去の歴史」の構築にとってオーラル・ヒストリーのはたす役割が浮かびあがる場でもあった。さらにオーラル・ヒストリーのもつオーラリティという特徴をふまえた可能性もあらたに検討されるべき新たな課題として浮上している。

【註】

1)　吉沢南の議論は、歴史学研究会編 1988『オーラル・ヒストリーと体験史―本多勝一の仕事をめぐって』青木書店、16-22 頁）に所収された「【座談会】歴史研究の方法と聞き取りの方法」による。（大門克正、2009）参照。

2) 本稿で映写会「記録された沖縄戦・語られる沖縄戦」をとりあげるにあたっては沖縄県公文書館主任専門員の久部良和子さんに多大なご協力をいただいたことを記して深謝いたします。また糸満市教育委員会の加島由美子さんと米須区長の山城茂さん、久保田宏さんのご協力にもお礼申しあげます。

3) 沖縄県公文書館所蔵の「沖縄戦証言記録テープ」のうち米須関係の公開テープを筆者がすべて聞いたことにもとづいている。

4)　経緯については久部良和子さんへのインタビューによる。なお、NHK 番組 ETV 特集「女たちの地上戦～沖縄 埋もれた録音テープ 150 時間の証言～」（2009 年 1 月 25 日放送）も参考とした。米須のほか糸満市与座や八重瀬町新城でも同じ趣旨の会が開かれている。

5) 本稿での氏名は、『沖縄県史』第 9 巻 915 頁に記載された名前に照らしたうえで映写会でナレーターが言い表した名前に拠っている。映写会での証言の構成は、久部良和子さんが音声状態等を考慮しながらおこなっている。なお、本文中の氏名について、引用以外では敬称を略する。

6) ＜歴史化＞とは、過去の出来事や過去の人が「歴史の領域にはいりつつある」ことを指す。過去に起こった出来事が歴史的出来事とされ、過去の人が歴史的人物としてみなされていく＜現在＞の営みを＜歴史化＞としている。＜歴史化＞の議論の詳細は、小林 2008 を参照。

なお、個人の歴史性に関わる文脈で個人の＜歴史化＞という概念を提起してるのは、ガーフィンケルである。ガーフィンケルは、新たなアイデンティティに沿ったライフストーリー構築を「自分の現在の状況に歴史をあたえる過程」として「歴史化する historicize」過程と論じている（ガーフィンケル 1987）。この場合、「歴史化」とは、これまで通ってきた道をたどり、読み直す、つまり自分の過去を何度も読み直し、現在の自分が大事にしているものや自分の願望の証拠となるものを求めた過程であり、自分の状況を歴史をもったものにし、社会的に是認されるライフストーリーを作りあげ、現在の状況を意味あるものとする実践をさしている。

7) 地元新聞に掲載された「死亡報告の記事」を指している。

8) ＜現前化＞とは、『声と現象』（2005）を論じたデリダがいう「現前」、すなわち根源的直観に対して事

象が「根源的能与性」として立ち現れることを指し、その時間的なあり方を「現在」としていることをふまえて（デリダ 2005）、本稿で＜現前化＞は「いま-ここに」直接にありありとあるものとして立ち現れることをさしている。

9）シュッツが類型化した世代連続的他者とは「同時代者 contemporaries」「先行者 predecessors」「後続者 successors」「コンソシエーツ（共在者）consociates」という四種類の他者を指す。私たちにとっての他者は、過去－現在－未来という時間次元をもとにすると、私の時代以前に生きていた先行者、私がその人と時代的現実を共有している同時代者、私が死んだ後に生きていく人で、私の生涯では匿名的であり続ける後続者という三種の他者が存在している。そのなかで先行者は、私が働きかけることのできない人であるが、先行者の行為の所産は私にとって解釈の対象として開かれており、私自身の行為に影響をあたえる可能性がある（ナタンソン編, 1985:150-151）。

10）本稿ではオーラルな語りを重視したが、語り手は当時の体験を文章でも綴っている。

11）世代継承性（ジェネラティヴィティ generativity）はもともとエリクソンが出した成人期における発達課題の概念であるが、世代の同時代性と連続的継承性の考え方を示し、「一つの世代から次の世代への連続性を保持する努力」として広く援用されている。ジェネラティヴィティについては小林 2008b で論じている。また本稿は筆者が日系アメリカ人の強制収容所体験をめぐる議論で提起した論点を展開させたものである。

12）オーラリティを＜声＞と＜聴く＞ことの観点から論じた点は、小林 2009 を参照。

13）「レガシー・ジェネレーション」とは、日系アメリカ人三世の言葉で、第二次世界大戦中に強制収容を体験した日系一世二世の世代からその体験をレガシー（legacy）つまり遺産として継承する世代であると自らの世代を言い表したことにもとづいている。小林 2008b:30-31 を参照。

14）戦争体験を語る声の公開という点ではたとえば国立広島死没者追悼平和祈念館など複数の機関ですでに取組がある。

【参考文献】

デリダ、ジャック，2005,『声と現象－フッサールの現象学における記号の問題』林好雄訳，筑摩書房

Erikson,E.H. 1963 *Childhood and society*, Norton （E・H・エリクソン『幼児期と社会』ⅠⅡ 仁科弥生訳，みすず書房 1977／1980）

ガーフィンケル、ハロルド，1987,「アグネス、彼女はいかにして女になり続けたか―ある両性的人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」『エスノメソドロジー―社会学的思考の解体』好井裕明・山田富秋・山崎敬一訳，せりか書房

糸満市史編集委員会，1998,『糸満市史 資料編 7 戦時資料下巻―戦災記録・体験談―』

糸満市史編集委員会，2003,『糸満市史 資料編 7 戦時資料上巻』

小林多寿子，2006,「ミニドカ・ピルグリメージーオーラルストーリーからみる日系アメリカ人の「記憶の場」－」『日本オーラル・ヒストリー研究』創刊号，日本オーラル・ヒストリー学会，34-49 頁

小林多寿子，2008a,「オーラルストーリーと個人の「歴史化」－ある日系アメリカ人一世の「ライフ」

への視点－」『フォーラム現代社会学』第 7 号，関西社会学会，49-61 頁
小林多寿子，2008b,「ミニドカを語り継ぐ―日系アメリカ人のインターンメント経験とジェネラティヴィティ―」『過去を忘れない―語り継ぐ経験の社会学』せりか書房，20-34 頁
小林多寿子，2009,「声を聴くこととオーラリティの社会学的可能性」『社会学評論』第 60 巻 1 号，日本社会学会，73-89 頁
ナタンソン編 1985『アルフレッド・シュッツ著作集　第 2 巻　社会的現実の問題［Ⅱ］』渡部・那須・西原訳，マルジュ社
ノラ、ピエール，2002,「序論　記憶と歴史のはざまに」長井伸二訳，ノラ編『記憶の場－フランス国民意識の分化＝社会史』第 1 巻　谷川稔監訳，岩波書店，pp.29-56
大門正克，2009,「オーラル・ヒストリーの実践と同時代史研究への挑戦―吉沢南の仕事を手がかりに―」『人文・社会科学研究とオーラル・ヒストリー』法政大学大原社会問題研究所編，御茶の水書房，21-46 頁
沖縄県，1975,『沖縄県史 第 10 巻』
Ricoeur, Paul, 1980 “Narrative Time” Ed. Mitchell, W.J.T., *On Narrative*, The University of Chicago Press, pp.165-186
リクール、ポール，1990,『時間と物語 Ⅲ 物語られる時間』久米博訳，新曜社
琉球政府，1971,『沖縄県史 第 9 巻』
シュッツ、アルフレッド，2006,『社会的世界の意味構成－理解社会学入門（改訂版）』佐藤嘉一訳，木鐸社
（本稿は 2009 年度科学研究費補助金基盤研究(C)［課題番号 20530482］による研究成果の一部である。）

（こばやし　たずこ　一橋大学大学院社会学研究科）